

病気療養児に対する余暇・学習支援活動の意識調査

施設職員と活動参加学生との比較を通して

○山下祥代

越智文香

越智彩帆

樫木暢子

(愛媛大学大学院教育学研究科 特別支援教育専攻)

(愛媛大学大学院教育学研究科)

KEY WORDS: 入院児 学習支援

(目的)

山崎ら(2006)は入院中の子どもは病気や治療、普段の生活から切り離されることによるストレスを感じており、看護師や保護者もストレスの緩和のために配慮、支援を行っているが勉強の遅れなどの学校に行けないことに起因する不安や焦りに対応するまでには至っていないと述べていることから、教育的な立場からの関わりが期待されているといえる。入院している子どもの教育的な関わりを提供する方法の1つとして、大学生による学習支援や余暇支援を行うボランティア活動が挙げられる。教育的ボランティア活動については多くの実践報告や意識調査がされているが、同施設内の職員と学生の意識を比較した調査は少ない。本研究では、ボランティア活動を受け入れている施設職員と活動参加学生の意識調査を比較し、スムーズな活動開始のため導入時の留意点を明らかにすることを目的としている。

(方法)

(1)質問紙調査

対象 学生による病気療養児に対する余暇・学習支援活動を受け入れている医療・療育施設 2 か所 (施設 A と施設 B)のボランティア学生と関わりをもつ職員を対象とした。

方法 施設 A は 20XX+3 年 10 月初旬、施設 B は 20XX+3 年 12 月初旬に代表者と手渡しで配布、回収を行った。

調査内容 アンケートは①余暇・学習支援ボランティア活動の必要性、②職員がボランティアに求める経験や知識、態度、③職員がボランティア活動に期待する内容や留意事項で構成し、②と③は 7 件法を用いて回答を求めた。

(2)聞き取り調査

対象 施設 A、施設 B で病気療養児を対象とした余暇・学習支援ボランティア活動を行っている大学生を対象とした。

実施期間及び調査方法 20XX 年から 20XX+4 年の間、ボランティア活動に参加する学生に対して 1 年毎に半構造化面接を実施した。調査人数の推移は次のとおりである。

施設 A : 2→2→5→4 施設 B : (2 年目から)6→4→1

調査内容 経験、ボランティア活動に参加する前後の印象、変化、ボランティア活動に期待することなどを尋ねた。

(3)分析

質問紙調査で得られた回答について施設間で比較し、因子分析を行った。聞き取り調査の結果は因子分析の結果を参考にカテゴリー分けを行い施設間で比較した。またそれぞれの結果から職員と学生の意識の比較、検討を行った。なお、本調査を行うにあたり研究の主旨とプライバシーの保護に関する説明を行い、回答者からの同意を得ている。

(結果)

<質問紙調査>回収数は施設 A21 部、施設 B23 部である。各項目に施設間で有意な差はなかった。事前知識や活動内容について因子分析を行った結果の一部を表 1 に示している。固有値の変化から活動開始前に習得してほしい事項と活動内容は 3 因子、留意事項は 2 因子構造を適用した。

事前に職員が求めているのは衛生に関する知識である。特に施設 B は 80% 近くの職員が重要だと考えている。加えて施設 A では病気に関する知識も必要だと考える傾向がある。活動に対して職員は子どもたちのネガティブな思考

の軽減とポジティブな思考の増大の 2 つの観点をもっていった。施設 A では 7 割の職員が長期的な見通しをもつ必要があると考えるのに対して、施設 B は半数程度となっている。活動中は情報の共有と指導助言を受けることに注目し、特に指導助言は外部の者ではなく、活動している施設内の職員から受けることが望まれている。

<聞き取り調査>事前に学生が必要だと考えるのは病気や心理解のための知識などの子どもを捉えるための知識である。施設 B で活動する学生は、①子どもへの配慮についても知り、②過去の活動実績や子どもの様子を引き継ぎして活動に臨むことが望ましいと考えていた。活動の内容に関しては、施設 A で活動する学生は、①子どもの長期的な目標を立てて活動に取り組み、継続して活動することが充実した活動になる、②情報の共有については、活動の内容や不安などを同じ活動を行う学生同士で共有することに有効性を感じ、定期的な情報交換会が必要だと考えていた。

<表 1 事前に身に付けて欲しい事項についての因子分析結果>

	I	II	III
第 I 因子 経験			
過去に病気の子とも関わった	.79		
過去に子どもに勉強を教えた	.97		
過去にボランティア活動に参加した	.83		
第 II 因子 知識			
衛生(マスクの着脱など)		.30	
教育技法		.94	
子どもの気持ちを理解する		.87	
第 III 因子 態度			
活動から知識や技能を得たい			1.05
子どもと一緒に楽しみたい			.59
累積因子負荷量	0.245	0.440	0.617

(考察)

施設 A・B 間の活動形態などの違いが重視する点に影響していると考えられる。施設 A は長期的に一人の子どもを学生が担当する形で活動を進めるため、職員、学生ともに活動に長期的な見通しをもって取り組むことを期待していると考えられる。一方、職員と学生の意識の相違点次の 2 点である。①活動前に必要とする知識について、職員が衛生に関して知っていて欲しいと考えるのに対して、学生は子どもを捉えるための情報を必要としていた。②情報の共有について職員は学生との共有を必要だと感じていたが、学生は学生間での共有に注目していた。活動導入時には、職員と学生との意識の違いに留意して、活動の説明や注意事項を伝えて引継ぎを行うことが必要であると考えられる。また、情報共有の方法として、学生間での定期的な機会を設けるとともに、職員と学生が容易に情報共有できるシステム作りが必要となると考えられる。

職員と学生の意識の差異を意識しながら活動を進めることがよりスムーズな活動や活動の普及に影響するであろう。

(文献)

山崎千裕ら(2006)入院中の子どものストレスとその緩和のための援助についての研究 第 3 報-入院児のストレスに関するインタビュー調査-,小児保健研究,65,238-245

(YAMASHITA Sachiyo, OCHI Ayaka, OCHI Ayaho, KASHIKI Nagako)